

『暁の金槌～Iron Horse～』

【登場人物】

トレヴィッシュ（30代）

発明家。蒸気の力に未来を見いだす夢想家であり実践家。

ジョーンズ（30代）

製鉄所の主任。現実的な視点でトレヴィッシュを支える友人。

ブラウン（30代）

鍛冶職人。寡黙だが確かな腕を持ち、鉄と火に誠実な職人。

ホムフレイ（40代）

製鉄所の経営者。豪快で樂観的。

クローシェイ（40代）

ライバル経営者。冷徹で懷疑的

フランセス（30代）

クローシェイの秘書。帳簿を握り、期限や条件を冷徹に突きつける女性。

ジェーン（30代）

トレヴィッシュの妻

【あらすじ】

十九世紀初頭、イギリス・ウェールズ南部、ペナダレン。

石炭と鉄が国的心臓を打つ時代——煙突は天を焦がし、鉱夫たちの汗は闇を濡らし、街には新たな富と貧しさが交錯していた。産業革命の胎動が大地を震わせる中、ひとりの発明家リチャード・トレヴィッシュは、蒸気の力で鉄を運ぶという壮大な夢に挑んでいた。

仲間とともに世界初の蒸気機関車『ペナダレン号』の設計に取り組むが、その道程には安全性や資金、期限、そしてライバルたちの思惑が重くのしかかる。労働者の叫びと工場の轟音の中で、彼の挑戦は時代そのものと戦っていた。

やがて歴史を変える一步が刻まれる瞬間が訪れる——。

だが、その歩みは決して栄光に満ちたものではなかつた。

彼は、多くの夢を未来に託しながらも、生涯は貧困と孤独に沈み、静かに幕を閉じた。

それでも彼が残した火は消えず、蒸気の轟きは、時代を駆け抜けてゆく。

響かせろ！轟音とともに走り出すペナダレン号！進め！地の果てまで！

これは、時代の先を疾駆した蒸気機関車の先駆者であり、産業革命の光と影を体現した発明家の夢と代償を描く伝記劇である。

第一場 「幻の灯火 — Phantom Lamp —」

(舞台：暗がりの工房。机の上には散乱した設計図、コンパス、墨壺、小さな模型の車輪。炉は冷えて沈黙している。外からは風のうなりと遠い工場の槌音。しばし沈黙。トレヴィシックが紙に向かい、鉛筆を走らせる。)

トレヴィシック（独白、紙に刻みつけるように）「……いや、違う。
ここでは力が逃げる。弁はもつと狭く、圧は強く、鉄の中に閉じ込めなければならない。蒸気の息吹を逃がしてはならぬ。ここに心臓を……脈打つ鼓動を……。どうすれば、この冷たい鉄に血を通わせられる？馬は蹄で大地を打つ。ならば俺の馬は、鉄の輪で大地を震わせる。誰も辿り着いたことのない速さ……誰も見たことのない景色……！」

（鉛筆を置き、机から立ち上がる。小さな車輪をつかみ、ぐるぐると回し始める。）

トレヴィシック「走れ……！ もつと速く！ 鉄よ、叫べ！ 人の足を越え、大地を裂き、煙を噴き、雷鳴を轟かせろ！」

（車輪の回転が止まり、机に落ちる。静寂。彼は荒い息をつき、額の汗を拭う。）

（扉が軋み、ジョーンズが入ってくる。煤けた顔、疲れ切った眼差し。手には工具。）

ジョーンズ「また夜通し机にかじりついているのか、リチャード。」

トレヴィシック（振り向き、苛立ちと誇りを混ぜた声で）「かじりつ

いてなどいない。俺は……未来を描いてるんだ。」

ジョーンズ（鼻で笑って）「未来？　俺の目に映るのは、くしゃくしゃに擦れた紙と、転がつたおもちゃの車輪だけだ。」

トレヴィシック（机を叩き、熱を込めて）「おもちゃじゃない！　これは鉄の馬だ。蒸気を食らい、火を喰らい、大地を駆け抜ける獣だ！　馬車では追いつけない。風さえも掴まえられる！　リース、これを見てくれ！」

（設計図を見せるトレヴィシック）

ジョーンズ（じっと見つめて）「……お前の口からは、夢ばかりだ。馬は草を食えば走る。だがお前の鉄の馬は石炭を食らい、水を飲み、金を無限に飲み込む。こんなもの、誰が支えるんだ！　時間を無駄にはしたくない。」

トレヴィシック（食い下がるように）「支えるのは未来そのものさ！」

石炭の山は尽きない。水も湧き続ける。金は……金は流れरけど。だがその金さえも、鉄の馬が運ぶだろう！」

ジョーンズ（低く、現実を突きつける）「なあ、町を見ろ。鉱夫は一日働いても腹いっぱい食えやしない。炉の熱で汗を絞り、肺を煤で潰されている。その現実の上に、誰が『夢の馬』を走らせる？　紙の上では走るかもしれない。だが鉄は冷たい。叩いても、願つても、簡単には心臓を持たん。」

トレヴィシック（しばし黙り、低く）「……だからこそ、俺は鉄に心臓を与える。ただの塊ではない。火を宿し、蒸気を吹き、俺の描いた線が——この大地を動かすんだ。」

（間。二人は睨み合い、工房に沈黙が降りる。外の風が窓を叩く音。その瞬間、遠くの工場の槌音が響き、トレヴィシックは無意識に拳

を握る。)

(静寂。外の風音。工房の奥、炉の影からブラウンが現れる。煤にまみれた無骨な姿。言葉はなく、手に鉄槌を握っている。彼は炉に火種をくべる。ぱちりと音が弾け、暗がりが赤く染まる。)

ジョーンズ 「……ブラウン。お前までこんな夜更けに。」

(ブラウンは答えず、火箸で炭を押し込む。火が息を吹き返し、工房に熱気が戻る。)

トレヴィシック (その炎に見入りながら) 「見ろ……鉄が目を覚ました。この灯りはただの炎じゃない。未来を照らす幻の灯火だ。」

ジョーンズ (ため息混じりに) 「灯火が幻だから困るんだ。火は消える。現実は残る。」

(ブラウンは黙つたまま鉄片を炉に入れ、やがて真っ赤になつた鉄を取り出す。鉄床に置き、槌を振り下ろす。カーン——！ 工房に響き渡る。)

(トレヴィシックとジョーンズはその音に振り向く。ブラウンは言葉少なく、再び槌を振るう。)

ブラウン (低く、短く) 「……鉄は熱いうちに打て」

(再びカーン——！ 火花が散り、工房は一瞬きらめく。)

(トレヴィシックはその音に呼応するように、机に広げた設計図を握りしめる。)

トレヴィシック (昂ぶつて) 「ブラウンの言うとおりだ！ 幻でもいい。いま打たれた一撃は、やがて雷鳴となる。この手で、鉄に心臓を与えるのだ！」

(ジョーンズはその姿を見つめ、しばし黙り込む。炉の炎と槌音だけが工房に響く。やがてジョーンズは、静かに口を開く。)

ジョーンズ「……リチャード、お前の熱は確かに本物だ。だが、その熱に焼かれて消えるのは、お前自身かもしけん。夢を追うのは勝手だ。だが巻き込まれる者たちのこと少しは考えろ。」

(フラウンは黙々と槌を振り続け、トレヴィシックは答えない。設計図を見つめ、炎に照らされた顔は決意と狂気の狭間で揺れる。)

(炉の火は小康を得て、工房は赤々と照らされている。ジョーンズとフラウンは黙々と作業を続け、やがて工具を置く。)

ジョーンズ「もう夜明けが近い。俺は休む。リチャード、お前は……もう少し冷えた頭でその図面を見直せ。」

(フラウンも黙つて頷き、鉄槌を置く。二人は火の残る炉を後にし、工房を出る。)

(静けさが戻る。設計図を見つめ続けるトレヴィシック。その背後の扉が静かに開く。ジョーンズがランプと、布に包んだ小さなパンを手に立っている。)

ジョーンズ「……あなた。まだ起きていたのね。」

(トレヴィシックは振り向かず、紙に鉛筆を走らせる。)

トレヴィシック「眠つてなどいられない。この線一本が、未来を決めるんだ。」

(ジョーンズ、ため息をつき、机に布包みを置く。冷えたパンがあらわになる。)

ジェーン「未来……未来……。あなたの未来の中に、私や子どもはいるの？家には灯りもなく、夕餉も冷め、子どもは父の声を知らずに眠っている。」

トレヴィシック（苛立ちは抑えつつ）「すまない、ジェーン。だが、これが完成すれば……」

ジェーン（遮り、パンを卓に置く）「完成すれば？　その言葉を何度も聞いたでしよう。残されるのは、未完成の図面と冷えたパンばかり。子どもがあなたを待ちきれずに食べ残した、このパンのように。もう随分帰ってないじゃない。そんな幻ばかり見てないで少しは私たちのことを見たらどう？」

（トレヴィシック、パンを見つめ、手に取り、ひとかじりする。口に広がる硬さと冷たさに、彼は一瞬言葉を失う。やがて低く吐き出すように。）

トレヴィシック「幻……かもしれない。だが俺は見てしまったんだ。煙を吐き、雷のように走る鉄の馬を。それを形にせずには、眠る」となどできない。」

（ジェーンはパンをひとかじり、しっかりと咀嚼して飲み下す。）

ジェーン「……あなたの心にあるのは、わたしたちではなく、鉄の幻なのね。」

（ジェーン、パンの残りを机に置き、ランプを手に取る。炎が彼女の顔を照らし、憂いを帯びた瞳が光る。彼女は扉へ向かい、灯りと共に去ってゆく。）

（工房には再び設計図と炉の赤だけが残る。トレヴィシックは硬いパンを見つめ、机に突っ伏し、鉛筆で紙を擦り続ける。その背に赤い炎が揺れ、影が壁いっぱいに広がる。）

——暗転。

第一場 「賭け —gamble—」

(朝。工房。窓から白い朝の光。炉にはまだ昨夜の余熱が残つてゐる。トレヴィシックは机に突つ伏して眠つてゐる。設計図は散らかり、冷えたパンが一片残つてゐる。)

(ジョーンズが入つてくる。腕まくりをし、工具を抱えている。ブランも後から入つてくる。寡黙に炉を覗き、炭を足す。)

ジョーンズ「……おい、起きろ。未来を描く紙の上で眠つてじうする。」

(トレヴィシックが目をこすり、顔を上げる。)

トレヴィシック「眠っていたのか……？ 夢を見ていた。鉄の馬が走る夢を。」

ジョーンズ（苦笑して）「そうか。だつたらさつさと夢から目を覚ませ。今日の話し合いには大物が来る。机の上じやなく、現実の前で戦うんだ。」

(トレヴィシック、机に散らばる設計図を両手で掘み、広げる。)

トレヴィシック「見てくれ、この線を！ ）に心臓を、この弁に息を……。火を飲み、蒸気を吹けば、鉄は走るんだ！」

ジョーンズ（紙を覗き込み、首を振る）「紙の上では走る。だが実際に叩くのは俺たちだ。鉄は気まぐれだ。叩けば応えるときもあるが、黙つてるときもある。そして黙る鉄は、二度と声を返さないんだよ。」

トレヴィシック（強く）「だからこそ俺たちが声を与える！ 鉄に心臓を打ち込むんだ！」

ジョーンズ（苛立ち混じりに）「心臓、心臓とお前は言うがな……！」

工場にいる誰もが自分の心臓をすり減らして働いてるんだ。鉱夫は一日中汗を流しても腹いっぱい食えない。子どもだって石炭を担いで咳をしてる。お前の夢は、その現実の上に築かれるんだぞ。とつととそこを片付ける。」

(間。ジョーンズの言葉に、トレヴィシックは一瞬言葉を失う。だがすぐに目を燃やす。)

トレヴィシック「……わかつている。だからこそだ。石を運ぶ馬車

より、速く、強く……。この鉄の馬が走れば、石炭も鉄も

富も、一度に運べる。鉱夫の背中を押し、子どもたちから荷を下ろすことができる!」

ジョーンズ（じつと見て、やや柔らかく）「……本当にそうなるか？」

俺にはまだわからん。だが一つだけ確かなことがある。お前の夢は、お前ひとりじゃ造れない。俺たちが叩き、支えなきや、鉄は目を覚まさないぞ。」

（トレヴィシック、ジョーンズの言葉に静かに頷く。炉の余熱がふつと揺れ、二人の影を壁に映す。）

（扉が大きく開き、サミュエル・ホムフレイが入ってくる。派手な身振り、朗らかな笑み。その後ろにリチャード・クローシェイ、冷ややかな眼差しで腕を組んで入る。最後にフランセス、帳簿と羽ペンを抱え、無駄のない足取りで現れる。）

ホムフレイ「おお！　これが未来を孕む洗礼された場所か！　煤と汗と紙切れの匂いがするな！　トレヴィシック！　どうやらとんでもないものを生み出そうとしてると聞いたぞ！」

（トレヴィシック、緊張しつつも胸を張る。）

トレヴィシック「……ホムフレイ氏、お越しいただき光榮です。私

は蒸気の力で鉄を運ぶ機関を――の大地に走る鉄の馬を造ります！　これを見てください！」

ホムフレイ（目を輝かせ、机を叩く）「鉄の馬か！　いい響きだ！　もしその馬が走れば、石炭も鉄も富も、この国を縦横無尽に駆け抜ける！　鉱山も工場も息を吹き返す！　ということだな！」

（トレヴィシック、クローシェイを見る）

トレヴィシック「はい……の方々は？」

ホムフレイ「おお、この方はかの有名な実業家、クローシェイ氏だ！お前の噂を聞いてくれたんだぞ！」

クローシェイ「リチャード・クローシェイだ。君の噂はかねがね。彼女は秘書のフランセス。よろしく頼む……それで、どんなものを見せてくれるんだね。」

トレヴィシック「鉄の馬です。」

クローシェイ「鉄の馬だと？ 荒唐無稽にも甚だしい。そのお前の言う鉄の馬とは一体なんだ？ この私の耳に届くように教えてくれたまえ、トレヴィシック君。」

トレヴィシック「鉄の馬——それは蒸気の鼓動を心臓に持ち、石炭の火を血潮とし、鉄路を大地の筋とする。馬が駆け抜けるよりも早く、重い鉄を運ぶ。人の腕でも、馬の脚でも叶わぬ速さと力を、この鉄の獣がもたらす！」

（さらに熱を帯び、群衆に向かつて語り始める。）

トレヴィシック「考えてみてください！ 馬十頭でやつと運ぶ鉄を、この一頭の鉄の馬が運び出す。石炭はより速く市場に届き、鋼はより多く街を潤す。鉱夫たちの労は軽くなり、商人たちは富を得る。遠い村へも物資が行き渡り、子どもらは飢えずに済む！ そして——この馬は鉄路を敷けばどこまでも行ける。海を渡らずとも、町と町が繋がる。人の往来は倍になり、歌も、知恵も、愛も……この鉄の上を走つてゆ

くのです！」

ホムフレイ（拍手し、声を張り上げる）「聞いたか！　これが未来だ！馬に縛られた過去ではなく、鉄が時代を引きずるのだ！」

クローシェイ「夢は実に美しい……だがこんなものが走るとは到底思えん。私にはただの重たい鉄屑にしか見えないがな。車輪を動かすにも莫大な石炭がいる。レールは砕け、金は煙になる。この狂想に、誰が賭けるというのだ？」

ホムフレイ（朗らかに笑つて）「だが、もし走れば！　この鉄路の上を鉄の馬が駆け抜けければ！工場も鉱山も、商売が一変する！　私は賭けるぞ、未来に！500ギニーだ！」

クローシェイ「笑わせるな。現実は残酷なものだ……では私は失敗に1000ギニー賭けよう。期限を設けよう。十日だ。それまでに完成させたら金をやろう。フランセス」

（クローシェイ、鼻で笑い、フランセスに視線をやる。フランセスは冷ややかに帳簿を開き、数字を読み上げる。）

フランセス「はい。条件はこの通り。——試験は十日後。——走行距離は製鉄所の軌道を一往復。——成功すれば支援は継続。——失敗すれば、すべての費用はトレヴィシック様がご負担を。ではこの紙に署名を。」

（ジョーンズが息を呑み、ブラウンが眉を寄せる。トレヴィシックは一瞬ためらい、しかし瞳を燃やして羽ペンを取る。）

トレヴィシック 「——賭けよう。俺の夢と、この命を。」

(彼が署名すると同時に、ホムフレイは豪快に笑い、クローシェイは薄く笑う。フランセスは無言で帳簿を閉じる。工房に張り詰めた空気が流れる。)

ホムフレイ 「期待してるぞ、リチャード！ 未来の天才に！」

(ホムフレイ、クローシェイ退場。少し遅れてフランセス退場)

ジョーンズ（低く）「……十日だと。短すぎる……」

トレヴィシック（署名を見つめながら）「十日あれば足りる。夢を現実に変えるには、たった十日で十分だ。」

ジョーンズ（苛立ちを滲ませて）「夢に賭けるのは勝手だ。だがな——負けたときに沈むのは、お前ひとりじゃない。ブラウンも、俺も……みんな背中にその賭けを負わされるんだぞ。」

(トレヴィシック、ゆっくりと顔を上げる。瞳は疲れながらも、炎のように燃えている。)

トレヴィシック 「だからこそ、俺は勝つ。幻では終わらせない。火がある限り、鉄は走る！ やつてくれるだろ……リース！」

(トレビシック、設計図を丸めてジョーンズに渡す。ジョーンズはその瞳をしばらく見つめ、やがて設計図に手をかける)

ジョーンズ（溜息混じりに）「決まったからには仕方ない……叩くしかないな。鉄も、運命も、俺たちの手でな。」

(「ハウン、炉に炭を投げ入れる。火が赤々と燃え上がり、工房を照らす。トレヴァイシックは机に設計図を広げ、拳を握りしめる。)

——暗転。

第11場 「鉄と汗 — iron & sweat —」

(舞台：工房と鉄路脇。時間は朝から夕刻へと移ろう。照明は徐々に赤みを帯び、炉の炎と交錯する。ジョーンズとハウンが鉄を運び、槌を振り下ろす。トレヴァイシックは設計図を机に広げ、必死に指示を飛ばす。)

(カーン！ カーン！ 火花が散り、鉄がうなりを上げる。観客に振動が伝わるほどのリズム。)

ジョーンズ（息を切らしながら）「リチャード！ ハの厚みじや車輪がもたん！ 軽くすぐきだ！」

トレヴァイシック（机に身を乗り出し、叫ぶ）「わたせる！ 壓を抱え込ませへ！ ハハハ逃がせば、走らん！」

(ハウンは無言で槌を振り下ろし続ける。汗が頬を伝い、鉄に滴る。蒸気が一瞬、宙へ立ち上る。)

ブラウン（低く）「……打てば、応える。」

（ジョーンズ、肩で息をしながら鉄を支える。必死に声を絞り出す。）

ジョーンズ「応えぬ時は……碎けるんだよ！」

トレヴィシック（図面を指差し、筆を走らせながら）「碎ける前に走らせる！ 鉄を走らせるんだ！」

（その瞬間、扉が開き、フランセスが現れる。冷たい足取りで机へ近づく。帳簿を抱え、静かに告げる。）

フランセス「（）機嫌よう……作業は順調のようですね。」

ジョーンズ「いったい何のようだ」

フランセス「スケジュールに訂正があり、お伝えするために来ました。」

トレヴィシック「どういった内容だ？」

フランセス「試験までの期日は十日ではなく、七日に変更されました。」

（場の空気が凍る。槌音が止まり、炉の炎だけが揺れる。）

ジョーンズ（振り返り、声を荒げる）「七日だと！？ 無茶だ！ 鉄は帳簿の数字で打てるものじゃないぞ！」

フランセス（冷徹に）「数字で動かぬものは、未来にも残らないものです。」

トレヴィシック「どうして急に……」

フランセス「資金の出資者たちは早く完成させようと催促なさいました」

ジョーンズ「ふざけるなよ！俺たちは血眼になつて間に合わせよう
にやつているんだぞ！あいつらは呑気にふんずりかえつ
ているだけだろうが！なあ！」

トレヴィシック「やめろ、リース」

（間。ジョーンズが食つてかかるうとすると、フランセスが一瞬だけ、視線を逸らす。机に散らばった冷えたパンの欠片に目を止め、低く呟く。）

フランセス（小声で）「……私の弟も、鉱山で石炭を担いでいる。

帳簿では石の数字だが、現実は咳と血の色。そんなこと十分に承知です。ですが早めなければなりません。資金が途絶えては続けようもないのでしょう。」

（彼女はすぐに表情を引き締め、帳簿を閉じる。冷徹な声に戻る。）

フランセス「——七日です。これ以上の延長は許されません。では失礼いたします。」

（扉を閉めて退場。残された三人は沈黙する。炉の火がぱちりと弾ける。）

ジョーンズ（震える声で）「七日……狂気だ。リチャード、本気なのが

か」

（トレヴィシックは机に身を乗り出し、炎に照らされ、燃える瞳で答える。）

トレヴィシック「七日あれば足りる。鉄は熱いうちに打てだ。」

(アーヴィングが槌を拾い直す。無言で炉に向かい、再び鉄を打ち始め
る。ジヨーンズもノブulpしづ工具を取り、力を込める。カーン！ 力
アン！ 火花が舞い、再び作業のリズムが戻る。)

(舞台全体が槌音と炎の赤に包まれる。観客に「鉄と汗」の息吹が
迫る。)

——暗転。

第四場 「最後のピース — the last piece —」

(舞台：夕暮れの工房。炉の火は弱まり、赤い光が薄暗く漂う。机
の上には散らかった設計図と、未完成の部品。)

(アーヴィング、ジヨーンズ、ブライアンが動力部分を試運転し始め
る)

ジヨーンズ 「よー、これでいいだ」

トレヴィンシック 「動かしてみよう、ブライアン。やってみてくれ。」

(ブラウン、機関の動力部を調整している。ハンドルを回すが、ガシャリと音を立てて止まる。彼は顔を覆い、深いため息をつく。)

トレヴィシック「……なぜだ。あと一步なのに。最後のピースが見えない。心臓部が……脈を打たない。」

ジョーンズ「リチャード、今日はもうおしまいにしよう。限界が来たんだ。」

ブラウン（低く）「……火が消えかけている。」

トレヴィシック「もう一度だ、もう一度バルブ部分を調節してやってみてくれ」

（ブラウン、ハンドルを持って再度起動する、今度はオーバーヒートして爆発する。外からは労働者の帰宅を告げるような遠い鐘の音。）

（ジョーンズとブラウンは、互いに視線を交わし、無言で工房を去っていく。静寂が広がる。トレヴィシックは拳を机に叩きつけ、動力部品を叩き壊して、再び机に顔を伏せ、時が流れ。）

（夜更け、ジェーンが入ってくる。手には古びたオルゴールを抱えている。）

ジェーン「……子どもがね、このオルゴールを落として壊してしまったの。直してほしいって。」

トレヴィシック「ああ……直しておくよ。」

(机にオルゴールを置く。歯車が外れ、かすかに鈍い音を立てる。
トレヴィシックはしばらく沈黙し、オルゴールを手に取る。小さな
部品を弄りながら、懐から懐中時計を取り出す。)

ジエーン「あなた、いつもその時計を肌身離さず持つていてるわね」

トレヴィシック「……父の形見なんだ。まだ子どもの頃、あの工房の隅で、俺は毎晩この針の動きを見つめていた。父は鉄鉱を掘る人だった。大きな体で、煤にまみれて帰ってきて、けれど手の中には、いつもこの小さな時計を握っていた。ある夜、父が笑つて言つたんだ。『リチャード、時は止まらない。けれど人間は止まる。だからこそ、お前は“動き続けるもの”を造れ。』その言葉が、耳から離れなかつた。石炭

の匂いも、煤けたランプの光、父の手の温もりすら……それらすべてが、この小さな針の音と一緒に、俺の中で鳴り続けているんだ。だが……今の俺はまるで止まつた針のようにしか感じられないんだ。」

ジエーン「……なら耳に当てて聞いてみたら、お父様の声をもう一度。」

(トレヴィシック、懐中時計を耳に当てる。時計の針の音が一刻一刻と鳴り響く。)

(ふと目を見開く。設計図を取り出し、オルゴールと時計を見比べながら、鉛筆を走らせる。)

トレヴィシック「……歯車が……小さな歯車がひとつ噛み合えば、次の歯車を押し、さらに大きな歯車を回す。オルゴールは指先ほどの力で、美しい音を響かせる……。懐中時計は豆

粒のゼンマイで、長い時を刻み続ける……。つまり——蒸氣の力をすべて一点に叩き込むのではない！小さな力を、順に、段階に……歯車を伝わせ、やがて大きな車輪へと導けばいい！蒸氣は荒ぶる獣ではない……調律すれば楽器になる！この機関もまた、火のオルゴールだ！……そうちか！これだ！圧を逃がすのではなく、組み合わせる……！わかつたぞ！……ジェーン！これで最後のピースが埋まるぞ！」

（彼は熱狂的に書き込む。机にかじりつき、鉛筆の音が烈しく響く。

ジェーンはその姿を見つめ、悲しげに首を振る。）

ジェーン「……あなたは家族と話すときよりも、鉄と歯車に語りかけている時のほうが生き生きしている。私たちの声は、もうあなたには届かないのね。」

（トレヴィッシュは狂熱的に設計図を書き続けている。ジェーンは扉の前で足を止める。炎に照らされ、彼女の横顔が赤く浮かび上がる。）

ジェーン（独白）「……わたしたちは、ずっと同じ家にいるのに、あなたの心は遠くの煙の彼方にある。子どもの笑い声よりも、炉の唸りを聞き、わたしの眼差しよりも、図面の線を追い続ける。あなたが夢に駆けていることは、わかっている。その夢が、この国を変えるかもしれないことも。けれど……その夢の中に、わたしたちはもう居場所を持ってない。リチャード……あなたは、わたしの夫ではなく、“鉄の幻”の夫なのね。」

(ジョーンは小さく息をつき、背を向ける。扉を静かに閉め、灯りが遠ざかる。工房にはトレヴィシックの鉛筆の走る音と、弱まる炉の炎だけが残る。)

——暗転。

第五場 「鉄の馬、走る — steel run —」

(舞台：ペナダレン製鉄所の鉄路脇。舞台奥に覆い布をかけられた巨大な影。群衆がざわめき、労働者、子ども、婦人たちが入り乱れる。ホムフレイとクローシェイが中央に立ち、フランセスは帳簿を抱えて静かに待機している。)

(やがてトレヴィシックが姿を現す。煤にまみれ、目は異様な光を帯びている。ジョーンズとブラウンはその背後に立ち、疲労の色を隠しながらも緊張の面持ち。)

ホムフレイ（朗々と）「諸君！ 見よ、この空を！ 煙突の煙が天を焦がし、石炭の火が大地を染めている！ われらは鉄と汗でこの国を築いてきた！ だが——時代はさらに先へ進む！ 馬に頼る日々は終わりだ！ 蹄鉄の音に代わり、鉄の車輪が轟くだろう！」^{（）}ペナダレンに立ち会う君たちは、後にこう語るに違いない。“わたしは見た、世界を変える雷鳴の瞬間を！” と！ この賭けは遊びではない。金も名誉も、そして未来そのものを懸けた真剣勝負だ！ だが私は恐ぬ！ リチャード・トレヴィシックの夢に——私は賭ける！」

（群衆が沸き立つ。歓声、口笛、手拍子が広がる。一方でクローシェイは首を振り、鼻で笑う。）

クローシェイ（冷ややかに）「賭け金を燃やす火遊びにしか見えんがな。」

ホムフレイ（さらに声を張り上げ、観衆を煽る）「笑いたければ笑え！だが今ここで、鉄の獣が走り出せば、笑うのは我々だ！ペナダレンの地から始まる雷鳴は、やがてロンドンを、世界を揺るがす！さあ諸君、目を見開け！ 未来が走り出す瞬間を見逃すな！」

（布が取り払われ、“ペナダレン号”が姿を現す。群衆がどよめきの声を上げる。）

ホムフレイ（大声で観客に）「諸君！ ここに未来がある！馬を越え、大地を駆ける鉄の獣——その名も“ペナダレン号”だ！」

クローシェイ（冷笑して）「ただの鉄の山だ。動くまではな。」

ホムフレイ「ついにこの日がやつてきたなトレヴィシック！……しかし、素晴らしい。こんなものを造ってしまうとは、やはりお前は天才だ！」

トレヴィシック「光榮です。こいつは我々の未来のためにあるんです」

ホムフレイ「では、見させてくれたまえ。こいつの声を聞かせてくれ。」

（トレビシック、ジョーンズに駆け寄る。）

トレヴィシック「……あと四分の一回転……いや、時間がない。行く。」

ジョーンズ「それで持つか」

トレヴィシック 「持たせる」

ジョーンズ 「わかつた……いつでも行けるぞ！・石炭を汲め！」

(トレヴィシックが炉口に石炭を投げ入れる。シユウウウツ——蒸気の音が舞台を満たす。煙突から白煙が上がり、鉄の体が唸りを上げ始める。)

トレヴィシック (叫ぶように) 「走れ！ 鉄よ！ 」から世界を駆け抜けろ！」

(「ゴゴシと轟音。車輪が軋みながら動き出す。群衆が一齊に歓声を上げる。ゆっくりと、やがて加速し、舞台全体が振動するように演出される。)

ジョーンズ 「走っている！ 本当に走っているのか！」

ホムフレイ 「見ろ！ 鉄が馬を越えたぞ！」

(ホムフレイが両腕を掲げ、勝ち誇ったように笑う。クローシェイは顔を曇らせる。しかし——。)

トレヴィシック 「さあ！ 地の果てまで走り続ける！」

(しだいにゆっくり暗転していく。突然、甲高い音。ガシャツ！ レールが碎ける音。蒸気が暴発し、煙が一気に舞台を覆う。群衆の歎声が悲鳴に変わる。)

第六場 「余熱 —afterglow—」

(舞台：数日後の工房。炉は冷え、灰が積もっている。机の上には新聞が散らばり、煤に汚れた設計図が山積みになっている。トレヴィッシュは机に突っ伏している。ジョーンズが新聞を手に座っている。)

ジョーンズ（新聞を開き、読み上げる）「なありチャード、これを見ろ——“鉄の獣、試運転にて大破。未来の夢は煙と共に散つた”。クローシュトイドく——“やはり狂気の沙汰だつた。馬に勝るものなどない”。ホムフレイでさえ——“投資は誇らしい賭けだったが、蒸気機関車は商いには耐えぬ”——だとよ。あいつら酷い」と書きやがる。」

（トレヴィッシュ、顔を上げずに震える声で）

トレヴィシック「……だが……走ったんだ。あの馬は、確かに走つた……。プレートがもたなかつただけだ……設計図に間違いなんてない。」

ジョーンズ（新聞を握り潰し、声を荒げて）「走つた？ ほんの一瞬だ！あの雷鳴に俺も心を震わせた。だが残つたのは砕けたレールと煤の山だ！夢じや腹は膨れん、家も建たん！お前の妻も、子どももな！」

（置いてあるオルゴールを投げつけるジョーンズ。トレヴィシック、椅子を蹴つて立ち上がる。）

トレヴィシック「一瞬でも未来を見せられた！それで十分だ！火は消えてなどいない！」

ジョーンズ（苦悶しながら）「未来、未来とお前は言う。だが俺たちは“今”を生きているんだ！お前の未来に賭けて、俺は汗を流した。槌を振り、体を削つた。けれど残つたのは壊れた鉄の塊と、冷たい灰だけだ！」

（沈黙。ジョーンズは震える拳を机に叩きつける。トレヴィシックは目を逸らさない。二人の視線が激しくぶつかる。）

トレヴィシック「……ジョーンズ、お今まで俺を見捨てるのか。妻や娘のように。」

ジョーンズ（声を震わせて）「俺は……ずっとお前の夢に肩を貸してきた。信じていたんだ。誰よりも。だが、もうこれ以上は背負えない……お前は時代の先に行きすぎたんだ。俺たちの足場には、もうお前を支える地面は残つていない。」

（間。）

ジョーンズ「……すまない、リチャード。目を覚ましてくれ、そうでなければ……もう、ここにはいられない。」

(ジョーンズは新聞を机に置き、出口へ向かう。扉の前で振り返り、最後に絞り出すよう。)

ジョーンズ「——これでお別れだ。」

(去っていく。扉が閉まり、静寂。舞台にトレヴィシックだけが残る。彼はふらつきながら机に戻り、鉛筆を取り、紙に震える線を走らせる。)

(ラウンが入ってくる。)

トレヴィシック「お前も帰つていいぞ、ブラウン。よくやつてくれた……」

(ラウン、金槌をトレヴィシックの前に置き、見つめる。)

ブラウン「……お前の火は……まだ残つている。その火を消さないようだ。鉄は熱いうちに打て。」

(ラウンそのまま去っていく。)

(トレヴィシック、ゆっくりと顔を上げる。煤にまみれた頬を伝う汗と涙が光に照らされる。彼は震える手で金槌を握り、設計図を見つめながら、独白を始める。)

トレヴィシック「……そうだ……火は消えちゃいない。誰も信じなくとも、笑い者になろうとも……」の胸の奥で、まだ鼓動が鳴っている。俺は見たんだ。煤けた空の向こうを駆け抜

……新しい血脉を。もし、この手が潰えても……」いつを
繼ぐ誰かが現れるだろう。未来は俺一人のものじやない。
だが——その未来を最初に夢見たのは、この俺だ。」

（彼は机に身を伏せ、渾身の力で鉛筆を走らせる。背後に未来の蒸
気機関車の幻影が、光の中に浮かび上がる。蒸氣の轟き、雷鳴の「
とき音が舞台を満たす。）

トレヴィシック（独白）

「——火は消えぬ。

灰の下に、赤き脈はまだ息づく。
笑え、人々よ。
嘲れ、時代よ。

だが耳を澄ませば聞こえるだろう——

鉄の鼓動、見えぬ地平を打つ響き。
煤けた空の向こうに、
影は駆ける。

雷鳴の馬よ、時を裂け。
煙をたなびかせ、大地を渡れ。
我が手は朽ちようとも、
夢は燃え尽きぬ。
名は消えようとも、
轟きは未来に残る。

——進め。

進め、鉄の馬よ。

地の果てまで、火を曳いて走れ！」

（光が一気に舞台を包み込み、観客の目に「余熱」と「未来の幻影」
が焼きつけられる。）

——暗転。

〈終幕〉